

大猷院

大猷院には、徳川三代将軍・家光（西暦 1604-1651）の終の場所(廟)が置かれています。家光は 1623 年に将軍となりましたが、彼の父である二代将軍秀忠は 1632 年に彼が亡くなるまで権力を握っていました。このように父親が将軍を引退したあとも権力を握り続けることは、初代将軍家康と二代将軍秀忠の時にもあり、家康の場合は、1603 年に将軍となり 1605 年に将軍の座を秀忠に譲っていますが、1616 年まで権力を握り続けていました。1633 年に家光が権力を掌握した後、幕府は権力基盤を固め、1867 年に幕府がなくなるまでこの政治体制を維持しました。

家光は強力な武家(の力を)抑える政策を実行し、その功績は、何世紀にもわたって日本社会に影響を与えました。1600 年の関が原の戦いの後、それらの武家は、祖父・家康の偉業(=日本統一)前から政治的自立を果たしており、(徳川家に)従属的でありつづけることに決して甘んじることがありませんでした。(彼が発言したとされる)有名なエピソードがあります。家光は、あるとき自分よりはるかに年上の臣下を招集し、こう言ったのです。“我は生まれながらの将軍である。よってこれからは、そちらを家来として扱う。不服の者は国に帰り戦の準備をせよ”と。

(その出来事のあと)彼はその治世の初期に、“参勤交代”を制定します。

“参勤交代”とは、大名が江戸（東京）と自分たちの故郷の領地の間を毎年行ったり来たりして生活拠点を移動することを義務づけたものです。(この制度によって、)大名たちは、本来であれば軍事力の強化に使うはずであった大量のお金を消費せざるを得なくなります。さらに“参勤交代”によって家光は大名をより緊密に監視できるようになりました。その他、彼は、外国人が日本に入国し、日本人が出国するのを禁じた鎖国制度”の制定と、島原の乱（1637-1638）の鎮圧を行い、その後日本に二百年以上にわたる平和をもたらします。

大猷院は三代将軍家光の霊廟としての重要性だけでなく、徳川政権の力と権力を意味する建築物、装飾品と文化的財産が、敷地を満たしています。例えば、大猷院の参道には 3 つの門が連なっており、それぞれ悪を追い払う二体以上の天の戦士(守護神)が守護しています。普通の神社とお寺では、二体の守護神の安置された門が、ひとつあるだけです。さらに、石か銅でできた数多くの灯籠が一行に大

猷院への道に並んでいることもポイント。灯籠は各国の最も強い家(大名)から寄進されたものであり、どの灯籠も徳川家への従属を意味しています。中には皇室による寄進物もあります。これは徳川家と皇室の親密な関係を意味し、また徳川の支配の正当性をも象徴しています。大猷院はその歴史的な重要性から、決して見逃してはならない霊廟だと言えます。

大猷院外観は非常に美しいですが、同時に(この外観で)家光は祖父への敬意も表現しています。彼は東照宮の家康の墓所の近く場所を選び、彼自身の霊廟の壮大さが祖父を超えないよう注意を払いました。例えば、大猷院の色の組み合わせは、東照宮の金色と白とは対照的に、より控えめな金と黒です。装飾品は美しくはありつつも、比較的落ち着いたものになっています。